

学校法人大阪医科薬科大学理事長

植木 實さん



うえき・みのる 1939年、サイパン島生まれ。大阪医科大学卒業、同大大学院修了。同大教授、同大附属病院長、同大学長、同大理事長などを経て2016年4月から現職。日本産科婦人科学会名誉会員、日本婦人科腫瘍学会名誉会員。

が進み、今春、20の手術室と個室のICU（集中治療室）16床を備えた中央手術棟が完成。夏には西日本初の次世代がん治療拠点「関西BNCT（ホウ素中性子捕捉療法）医療センター」の建設も始まり、平成30年の完成を目指す。がんに集積する特性を持つホウ素薬剤を投与し、熱中性子を照射すると、がん細胞を選択的に破壊できる原理を応用した医療研究施設だ。国内トップクラスの研究者とも連携し、がん治療の先端研究成果を

「目指すのは存在感のある大学。患者さんと誠実に向き合い、積極的に責任を果たせる医療人を育てたい」。その力を込めた。

# ひとと誠実に向き合える医療人に

今年4月、大阪医科大学（医学部、看護学部）と大阪薬科大学（薬学部）の法人合併で理事長に就任。学校法人 大阪医科薬科大学として新たな一歩を踏み出した。数年前に予定される大学

「3学部が連携することで実践的なチーム医療教育が可能になる。創薬や再生医療をはじめ、学際的な教育研究分野の開拓にも大いに期待したいですね」

「高質な医療と教育を実践するには健全な経営基盤が不可欠」と語り、その手腕にも期待がかかる。

産婦人科医だった父の影響で「生命の誕生に立ち会いたい」と同じ医師の道に。子宮がんや子宮内膜症の研究で知られる。今年喜寿を迎えたが、週3回のジム通いで健康を維持し、激務の合間、囲碁クラブで対戦するのが唯一の息抜きという。自称、三段の腕前だ。



医・薬・看護連携で

系列関係のない私大同士の法人合併は全国的にも珍しい。背景にあるのが18歳人口が急激に減少する「2018年問題」。ともに大阪府高槻市にキャンパスを置く立地条件に加え、医・薬・看護の3学部を有する医療系総合大学への進化が両大学を結びつけた。

6年前、大阪医科大の理事長に就任以来、財務情報を開示することで透明度を高め、数年間続いた赤字経営を改善した。「高質な医療と教育を実践するには健全な経営基盤が不可欠」と語り、その手腕にも期待がかかる。

世界に発信する。少子高齢社会の到来で医療ニーズが多様化するなか、地域医療にも力を注ぎ、「地域になくてはならない病院に」が信条だ。昨年夏には医療と介護を融合させ、症状が安定した患者の長期受け入れも可能な三島南病院を高槻市内に開院した。年間2万5000人の検診者が訪れる健康科学クリニックのほか、訪問看護ステーションやデイケア・ケアプランセンターも整備し、予防から急性・慢性期、在宅まで医療ネットワークの充実を図る。

存在感のある大学へ